

萩吹く歌

室生犀星

青空文庫

あしからじとてこそ人の別れけめ

何かなにはの浦はすみうき

大和物

語

寝^{しん}についてもいうことは何時^{いつ}もただ一つ、京にのぼり^{みやづかえ} 仕^しして一身を立てなおすことであつた。練^{ねり}色^{いろ}の綾^{あや}の桂^{うちぎ}を取り出しては撫^なでさすり畳^{たた}み返し、そしてまたのべて見た^みりして、そのさきの宮仕の短い日をしのぶも生絹^{すずし}の思^{おも}いはかなんだ日の仕草^{しぐさ}であつた。桂はまだ匂^{にお}いをのこしているものの早その色を褪^あせかけようとしているほどだつた。

今は菟原^{うはら}ノ薄^{すすき}男^おとまで下賤^{げせん}な人のように世間で呼ばれるようになった右馬^{うま}の頭^{かみ}とても、そういう生絹のあどけなくも鋭いのぞみを見るともう生絹を京にやるよりほかに愛しようとてもなかつた。右馬の頭の機嫌の好い時、食うものにさえ欠けがちに寝についた夜に、お怒りになるようなら申し上げはいたしませんけれど、お怒りにならないようならお話いたしとうございますと低い^{こえ}声音で、月のような顔を擡^{もた}げる時、もう、生絹のいうことが何であるかが大抵わかつていた。眼を凝^こらして何時^{いつ}かはそれを聞きとどけねばならぬ右馬の

頭は、それだけに生絹の去ったあとに生絹のような女に行き逢うなどとは思ひもかけぬことだった。しかし生絹をこのまま蓬生よもぎうと蜘蛛くもの巣だらけな穴のような家に、眉すすを煤すすけさせて置くのは本心ではなかった。生絹をもつと美しくして見たい心と、宮仕みやづかえまで許すように深くも生絹のからだに心をつかつている右馬の頭は、いつも、最後に女としての危険を感じる奥のものに打ぶつかり、躊躇ためらわざるをえなかった。こういう愛かなしい時に誰の智恵をかりたらいいものだろうか。

右馬うまの頭かみは蘆あしで茸ふく金もいまは持たなかった。たくわえの米櫃こめびつにこおろぎが鳴き、生絹すずしはたけの揃すわぬ青菜の枯れ葉をすぐるのに、爪のあいだに泥をそめた。それも厭いとわぬすなおな女だった。だが、京にのぼるのぞみだけは二つの乳ぶさのまんなかに、誓ちかい文ふみをはさみ込んでるように棄てなかった。右馬の頭も下じもの役につき、なりわいを建てなおすことではどんなことでも辞いなまなかった。釣つりして雑魚ざこをかついでかえっても、なりわいの足しにはならないからである。風の荒かった冬のあいだに北側の屋根ひさは落ちかかり、壁の穴に零余子むかごの蔓つるはこそのままの枯れ葉をつけて、莢えんどう豆さやの莢さやのように干からびて鳴っていた。どちらにしても生絹とは別れて日に日を重ねて稼がねばならず、じつと垂れた頭に銭ぜにが鳴って聞えるのであった。生絹はいうのであった。便りのたびになにほどのか

お金はきつとお送りいたします。あなたさまのご都合よきときに紅梅色の一襲かさねなりとも送りくださいませ。いいえ、それより先に薄色のこまやかな襲なりとも、お見立てしてお便りするはでございまして、はや、京にのぼる答えと許しを得たようにいう、思いあがつた生絹だった。京の夕ぐれ、相つれてゆたかに歩くことも夢ではございません。たとえ女房のつとめ忙しくとも宿下りの日の久ひさかたのもの語りも、眼に見えるようでございします。それに引きかえ、この津つの国の難波なにわのさぶしさはしのんでも、きようあすの粟あわをさがすのにもほとほと永い間のことでもあります。指のささくれや手のよごれはともあれ、わたくしの恐ろしいのは若い女としての心が鈍ることです。たといまはまだ見られるほどの顔も、心が鈍ってゆけば、曇ってきたなくなってしまう。わたくしそれをあなたさまに申しあげて置かねばなりません。女の美しさをすりへらして来るものは此処ここ津の国の難波の土とほこりでございますもの。

右馬の頭はもういうこともなく、點頭うなずいて見せた。このままのなりわいを続けて行ったら、生絹すずしは泥くさい田舎女いなかになり果て和歌の才能すら難波の蓬生よもぎうのあいだに埋うもれてしまわねばならない。右馬の頭は生絹の詠ずる歌をよむときに、彼女の顔の白さがいつも照るように見えた。それほど、右馬の頭は生絹の歌を彼女のからだを飾る花のようなものに愛

していた。

「では行くがいい。三年したらわしも立ち直って迎えに行く。」

「いえ、わたくしの方からお迎えにまいりますわ。」

見違えるように美しくなり、津の国の泥をきれいに落してしまおうと生絹はいい、早、旅の装束をととのえはじめた。右馬の頭も、旅の費用にあてるため銀と金の剣けんをひそかに金にかえようと、ほど近い町にでかけて行つた。

生絹はその僅かな留守居のあいだにも、何度か聞きき耳みみを立て、何度か往来の道ばたに出で行つた。きゆうに春めいた田や畠は萌もえた青い粉を雑まぜた、襲かさねの色に見えた。僅かな留守居にも斯か様に待ち遠い思いをしているのに、京に一人でのぼって行くことが出来ようか、自分の考えはまちがっている、右馬の頭は剣さえ売って路用にあてようとしているではないか、生絹は柱につかまりもう行くまい、難波の土にうもれようと身をもがいてなみだぐんだ。

夜は風の音さえまぜておとずれたが、右馬の頭は遅くなつて町からもどつて来た。何枚かの黄金おうごんにかえた右馬の頭は路用もできたから、七日には立ちたまえ、壺装束つぼしょうぞくも明日はとどけてくれるからといったが、生絹は泣いていった。お別れするのはいや、考えち

がいして宮仕もするのいや、みやこにのぼることもいや、あなたのお傍そばにたたいとうございます。——右馬の頭はさまざまに言葉を分けていったが、生絹はその夜ははなれられぬ氣持を深める一方であつた。

「かくはかなさの身にしてみては、いづちもいづちもえ行くまじ。おん身さま一人ゐ残してあはれいづちもいづちもえ行くまじ。」

「己おのれはとてもかくても経へなむ、女のかく若き程に、かくてあるなむいといとほしき、京にのぼりてよき宮仕をもせよ。よろしきやにもならば、我をもとぶらへ、己ことも人の如ごともならば、必ず尋ねとぶらはむ。」

右馬うまの頭かみは三日つづけて生絹すずしを説き、やつと生絹はもとの望みをもつ女になつた。さらに三日のあいだは春あさい田もの面をながめながら歩き、三夜は襖ふすまもるかせさえ厭いとうほど別れを惜しんだ。金のあまりはそうにして七日のあいだ魚をあぶり酒をあたためるために使われた。

七日過ぎて生絹は立つた。壺装束つぼしようぞくに市女笠いちめがさをかむつた彼女は、細い旅の杖も、右馬の頭が用意していた。心なしか生絹は冴さえた美しい顔にやや朝寒むの臙えんじ膩じをひいた頬をてらして、いきいきとして見えた。

「では行つてまいります。」

彼等は斯様かようにして別れた。

淀よどの川かわ尻しりで舟に乗つた生絹は、右に生駒いこまの山、男おとこ山やまを見、左に天王山てんのうざんをのぞん

だ。男山の麓ふもと、橋本のあたりで舟は桂川かつらがわに入つて行つた。前の方に逢坂おうさか、比叡ひえい、左

に愛宕あたごや鞍馬くらまをのぞんだ生絹は、何年か前にいた京の美しい景色を胸によみがえらせた。

舟は川波にゆられ、客はみな西の京の人らしくこの頃京には笛吹くことがはやること、歌の道のこと、商いの品々も高くなつたことなどが話し出された。

「いずれに越されるや。」

同舟の人は故あるような生絹の愁うれい顔を見て、みやこに上る人ときめていった。

「物尋ものたずねにまいります。」

と、だけ詳しいことはいわなかった。その男は生絹の顔を占い見てから、

「御手おてを、……」

と、ひろげた手のひらを眺めてつくづくいうのであつた。「みやこにはあなたを待つ人がおられます。あなたの雅みやびたる才がその人を高きに從つかせる。」

「それはどういう意味でございましょうか。わたくしは人を尋ぬるのでございせんけれ

ど、……」

「宮^{みやづかえ}仕^しなされるのぞみはもう見えております。」

不思議な占いする男はそういう当て、生絹の心を騒がせた。生絹はべつに答えはしなかった。かような失礼なことを申すことをお許しあれ。わたしはただ自ら好きで人の運命を見ているにすぎない男ですと彼はふたたびいった。「失礼なようですけれどあなたはいま故ある人と別れて来られたばかりでしょう。それには間違いはない。……」

ついに生絹は答えぬわけには行かなかった。

「その方にまた逢うことができましようか。三年経つても逢うことができましようか。」

「……………」

占う男ははつきりした返事を控えているふうだった。その顔にはこの男に肖^にもやらぬ温かい愁いがあらわれ、生絹はその愁いに驚いて眼をとどめた。

「ではみやこのたつきのほどをお話しくださいませ。」

生絹も右馬の頭とのことをこの男の口から聞きたくはなかった。聞いて哀れをとめることを恐れた。「みやこにはあなたの幸いが待っております。それでこそ、あなたはすぐれた女として生きられるものが与えられるのです。あなたのえらんだみやこのなりわいには、

間違いはもうとうありません。あなたは知らず識らずのあいだにあなたの行く方向を手でさぐり当てられておられます。」

「どのようにしてそれがお解りになられます。」

生絹は言い当ててはあとに引かぬこの男の言葉の勁き^{つよ}に、しだいに心が惹かされて行つた。このように勁い言葉を持った男というものを見たことも、生まれてはじめてであつた。「それはわしの何といいましようか、かんのようなものです。」

男は先刻^{さつき}とは引きかえ熱心で元氣な声でいついだ。「あなたはすぐれた歌づくりである。その上、あなたのそのおん肌^{はだ}もかがやくようになられる。」

生絹は赧^{あか}くなつて心持手で顔を蔽^{おほ}うようにした。おそらく、生絹の皮膚がみがきようによつて、皓^{こう}たる美しさを備えることを見取つていったものであらう。生絹は白檀^{びやくだん}の香のしみる装束を搔きいだくようにして、占う男の言葉はすかしく思った。すでに、そういう占う男の言葉によらなくとも、何か氣負うた生絹の眉や眼の奥にも、難波^{なにわ}の土の匂いはとうに失^うせていた。

かくて占う男とも、別れるときが近づいて行つた。

「何時^{いつ}かまたお会いする時のあることをお約束しましょう。」

男はそういうと立ち上った。

「いろいろお話していただいてお礼申します。」

丹波口^{たんばぐち}に近いあたりで舟を下り、西の京の町にはいった生絹^{すずし}は、物商う声、ゆききする人の晴れやかな装束、音という音の雅^{みや}びたるに眼をみはった。とうとう、あこがれて此^こ処に來たかと生絹は好意に充ちた眼^{まな}ざしであたりを眺めた。とある庭のある構えの内からよき襲^{かさね}をひからせた物好きな男が一人、錢^{ぜに}乞^こうにはあらざるふうに細い笛を吹いて、生絹の顔をみつめていた。男の顔は粉のように白かった。小路^{こうじ}の角で、母屋^{おもや}の見える庭では、もう、梅が枝をはじめて咲いていた。難波ではまだ蕾^{つぼみ}も固かったのに、みやこの日の暖かさを思わずにいられなかった。

その夜は宿の灯の下で、何やら先刻から大切なことを考え忘れていることに、気づいた。それを思い出そうとしたが、思い出せなかった。

笛を吹いていた男はまるで女のような顔立ちだった。そう思いおこしたときに宿の裏庭のそとに、笛は規則正しい孔^{あな}に五本の指がしらを当てていることを知った。生絹は耳のなかに幾つも絵がひろがってゆくように、着いたばかりの京の町々をなつかしくも、思い描いた。

「片時もえ忘れじと思いに、わたしはまるでいままで右馬の頭さまのことを一度も思い出さなかった。」生絹はそんな自分をふしぎに思った。旅の途中から帰ってゆくような思いに迫られたらどうしよう、とさえ、思いわずろうたほどだった。それなのに、舟から下りてからも唯ただの一度も右馬の頭のことを思い出さなかったのである。

ひとりしていかにせましと侘わびつれば

そよとも前の萩おぎぞこたふる

また秋が来たとき生絹は笛吹く人の許もとに殿とのつかえ仕していたが、落着いて見れば津の国からの便りもあらず、生絹も雑用に趁おわれて問うこともなかった。今朝は萩おぎ薄すすきにそよ風の冁わたるのを見て、津の国の秋迫る日をおもい出て、その萩のほとりを去ることができなかった。笛吹くあるじの懇ねんごろさはあったが生絹はそれをしりぞけたことも、一度や二度ではなかった。生絹はいいかわした人のあることを言ってしまった方がいいと考えていたが、それをそのようにはつきりいえなかった。笛吹く人は生絹の手入してくれる笛、笛袋にも生絹がいなくてはならぬようになっていた。とり分け生絹の歌のしらべは笛吹く人にとつ

て音色に合わせるには、すぐれた優しさをもっていた。笛吹く人はそういう歌をつくる人
と行き逢うことを永い間、この人生でもとめあぐんでいたのである。自分の心と一緒のし
らべを持つ人はどこにも、いままでには見当らなかつた。

生絹は笛の音を簀すの子に出て、膝に手を置いてきき入っていた。吹く人はただ生絹の心
をめあてに吹きいつているようで、ほかに、誰も聞いてほしくないふうであつた。ふしぎ
に生絹は、「ひとりしていかにせましと侘わびつればそよとも前の萩はぎぞこたふる。」の歌の
しらべが、笛の音いろにあらわれていて、その人がこのようなしらべに乗せたのであろう
かとも思ふた。ことに、

ひとりしていかにせましと侘わびつれば、……の、静かな吹きはじまりのひと時は、生絹
の心を確しつりととらえて行つた。津の国を吹く風の音いろが薄す穂ほがしらをしずかにゆすつ
ては、廻はかにすぎはるてゆくような遠い思いであつた。とらえがたいものが物の精神こころになつて
見えて来た。

「そんなに君を悲しませるようなら外ほかの曲を吹こう。」
笛吹く人は哀れに啼なきいる生絹のために、笛を唇から放した。

「いえ、その曲をいつまでも聞いているとうございます。」

月明は笛吹く人の友だちのように訪れ、笛の冴えは道ゆく人の足をとどめるほど、遠いところまでひびいて行つた。津の国にまでこの音いろがとどいたなら、右馬の頭のところ
が分るだろうにと思うくらいだった。

「その人いかなる人にや、仔細あらずば言いも聞かせ。」

笛吹く人はついにこういつて生絹の答えを待った。

「それはただの男の方にすぎません。なりわいさえもできないような男でございます。」

笛吹くあるじは、笛の艶をみがいている生絹の白い頸に眼をとめ、気品ゆたかな女を見
入った。実際、生絹はもはや難波の里べで見た女とは変つて、おもだち清く品は眉宇にあ
ふれて青菜をあらうむかしの生絹の姿ではなかった。

「三とせ経てば逢うえにしを信じているのでございます。」

「使して尋ねみたらば、その人のゆくえが分ろう。」

笛吹く人はそんなことでねたみをかける人ではなく、何度も生絹に右馬の頭のゆくえを
たずねるようだったのであった。しかし生絹はそれをそうすることは気兼ねして出来ず、
ただこう答えるばかりであった。

「そのうちきつと便りがございましょうほどに、お氣にかけくださいますな。」

秋は何度もすぎた。津の国から便りはなく、会う人ごとに尋ねても右馬の頭らしい人を見かけたこともないといい、たずねる術すべもなかった。笛吹く人は家臣を難波に送ってたずねさせたが、これも空しくもどつて来ていった。「さういふ人を聞かず亦また見ざるとのみ、たづねんやうなし。或る下種げしゆの物売りの話にては一年あまり下役につきしよく似し人ありしが、首尾わるく辞してよりゆくへ知るべくもなしとのことなり。また或る人のいへらく右馬の頭らしき人の道のべに立ち、をかしき物ならべ商あきなひをしつるを見受けしが、夏去るころ見えなくなりけるとのみなり。」家臣はどうてい尋ねるようもないというのであった。生絹の顔はあおぎめ、心は沈み、「をかしき物ならべ商あきなひせる」ことを思いでて、ひとりであおい顔をそめて赭あからむほどであった。そんなことはあるまじ、物売るまでになる人ではない、生絹は恥ずかしきで身をちぢめるような思いだった。

「津の国に行きて見んにあるひはその人に逢はむも計りがたし、人づてのみにて心もとなし。」笛吹く人は素晴らしい、打沈んでゐる生絹をせき立てた。生絹はその心をどういつて喜んでいいか分らなかった。

「わたくし参つてよく尋ねて見ましょう。お許しがございますなら。」

「行つて心置きなく尋ねるがいい、路銀の用意も充分にせよ。」

生絹すずしは越えて六日に旅立つて行つた。津の国難波なにわの里は夏がすぎもう秋風が白い砂地のうえをひいやりと過ぎて行つた。町はずれの住んだ家に来て見れば母屋づくりの立派な一棟とむねのなかから、笙吹く音しょういろがきこえ、訪うことすらできなかつた。近くの家々の人も、あじろぐるまあじろぐるまの網代車まえずだれの前簾まえすだれの中の生絹の顔を見ることがなかつた。

「菟原ノ薄男うばら すすきおといえる人はいつごろ此処ここから去つたのでしょうか。」

「菟原ノ薄男は女の人の立つたあと直ぐに行方知れずになりましたよ。見かけた人もありそうに聞いていました。」

生絹は以前眺めた田や畠の景色にも、変つた身にそわぬものを感じた。しかも、新しい一棟の庭の樹々いちちいは一位も松の木も、みな昔のままだつた。

生絹は思い出して南の方の田の百姓家をおとずれた。そこは前によく野の菜の物あがなを購つた、かくれた一軒家であつたから網代車の簾すだれかき上げて、百姓の女に行き会つた。

「生絹さま、お立派になられました。」

「薄男すすきおはどうしていられるか教えてくだされぬか。」

「薄男さまは永い間釣をしてその魚を商うていられましたが、一年余り前から絶えてお姿を見かけたことがございません。」

此処でもその行方は知つてはいなかった。

「ゆつくりと町の通りを行くように、通りが、曲ればそのまま曲つて行きや。」生絹は下ノ者にそういいつけ、簾の間から町々を眺め、南から東に出て北の浦へに出たときには日はもうくれかかつていた。けれども、生絹は町から町へ網代車を遣つて、停めることがなかった。「日もくれかかりますゆえお宿とらねばなりません。」と何度もう下ノ者に、いま暫し、いま暫しといい、生絹は昔懐かしい町々を簾のあいから眺めた。衣を商う家、革をひさぐ家、魚をならべる店、わけて薄男がよく訪れた香さばく家、それらの店にすわる男らの顔にみな見覚えがあつた。小鳥の好きな兵衛は明日の朝の餌を摺るのに片肌ぬいで干鰯をしいていた。

西の浦に出た時に小路から担いきれぬほど蘆をかついだ、衣も綻び裸同様の乞食男一人出て、くれかけた町々に低い声音で呼びかけた。

「蘆いの、蘆いの。」

生絹は直覺的にそのききなれた声が、頭のまんなかを通りすぎるのを知った。その声に忘れぬ覚えがあつた。

「車を停めよ。」

車は止められた。生絹はまだ明るい夕あかりのなかに紛う方もない、菟原ノ薄男を見
たのであった。頬は窪み眼はおとろえ、これが薄男の右馬の頭とはどう考えても信じられ
ぬほどであった。

「蘆を買いとらせ、蘆売の男を早う呼び止めよ。」

生絹の声はやや鋭いほど急き込み、蘆売はそのときにはもう小路をまがり、べつの小
路にまがろうとする時だった。

「蘆、蘆をかうぞ。」

呼ばれた蘆売の男は停った。そして網代車をまぶしそうに見やった。それは全く右馬の
頭の眼差しにちがいがなかった。何というひどい変り様であろう。生絹は悪寒を総身におぼ
えて震えた。

「蘆を見ましよう。もそつと近くによつて下さい。」

男は蘆をならべて見せた。美しい丈のそろった青い打紐のような蘆の束が、いくつも、
ほぐされた。

「蘆商あきないてから久しくなりますか、蘆はたつきの代しろになりますか。」

生絹は右馬の頭がむかしの容貌を持っていないことを知った。

「蘆は秋ぐちに売り申すが冬は冬でべつの物を売りまする。」

右馬の頭はまだ何も知らぬふうであつた。生絹は多額の金をあたえたが、右馬の頭はそれは多すぎるといった。

「いつまでも商いする心でいられるのかや。」

男は簾すだれの中の声に不思議そうに小耳かたむけながら、低い声でいった。

「何もすることがない仕儀でこのような商いたしております。充分にお笑いくださいませ。」

「いえ、笑うことなぞよういたしませぬ。かように美事な蘆はもとみやこには一本も見られませんか。」

「みやこから参られた？」

「みやこから人を尋ねてまいりましたが、その人のお姿はなかやうに日ぐれに及んだのでございます。」

「人を尋ねてと仰おおせられるか。……」

右馬の頭は再び簾の中の女の顔を見ようとしたが、綾のようにすかすと見紛う簾ではよくは見えないもどかしさがあつた。

「何処どこの何という人か、あるいは存じているかも分りませぬ。」

「もと右馬の頭をしていた方でございます。」

その男の顔がさつと変つたとき、前まえすだれ簾しだれのすき間から月のように匂う生絹の顔をちらと見入った。生絹もその時不幸な一瞥いちべつを合わせたのであった。だが右馬の頭は物もいわずに恥ずかしさのためか、蘆の荷をとり乱したまま馳はしり出した。生絹はもうちよつこのとで車から出てあとを趁おうところであつた。

「お懐かしゅうございます右馬の頭さま、どのようにお逢いしたく永い間思いわずらうていたことでしょう。」

生絹は逃げかくれて馳はしるうしろ姿を見つめた。その心はどこかに冷たさのある、しかも人と人の苦しみのうえに乗っているような氣持だつた。逃げかくれる氣持も分るが、それをいま一度趁おうようになるのも拒さけられぬ女の心だつた。

「蘆売る人をさがせよ。かならず捜し出して下され。」

生絹の声は殆ど禱いのるように震えをおび、静かにしていられぬふうぼしよくに車から降り立つた。砂白く暮色ぼしよくは濃い藍あいをかさねた往来のうえに、いまは生絹みずからの顔すら町の人に見分けられぬふうであつた。生絹は一本の蘆を手にとりそのまっすぐに伸びた美しさに見とれながらふたたび右馬の頭さま、わたくしたちはなんという不幸な時ばかりを選んで、

そういう日にばかり逢わねばならぬのでしようと囁くようにいった。わたくしたちは逢えば逢うで悲しく、逢わざれば逢わざるが故に悲しいとしたらわたくしたちは一体どういう方向にむいて生きてゆくことになるのでしょうか。わたくしはそれを教える人に教わりたいたい、どこにそれを教える人がいるのでしょうか。生絹がこんな思いに乱れているあいだに下ノ者が慌てて来て、済まぬふうにいった。何処をさがしても見当りませぬ。町々を見分けましたが見附かりませぬ。

「わたくしだけの命令ではなく、みやこの殿のおいつけをも忘れぬよう。早うさがせよ。」

生絹の声は懸命な厳格さをおびて、いつになく下ノ者に烈しく答えた。わたくしは何のためにここに訪れて来たのであろう。みやこの平安さをなげにここに来てこわそうとするのであろう、しかも右馬の頭さまの心をふたたび取り乱そうとわたくしはその糸ぐちをいま解きかかっているのではないか。見なくともいい零落のお姿を見ようとし捜さなくともいいのにお隠れになるのを趁いづめようとする、そういう高飛車なつた気持ちにわたくしは何時なり変つたのであろうか。生絹はいまにも下ノ者にもはや蘆売る人を捜さなくともいいという命令を下そうかと、何度も思い惑うているところであつた。下ノ者は馳り来

て伝えていった。

「蘆売る男は見つかりましたが同行はいたしません。」

生絹はまぶしいような顔附をした。

右馬の頭うま かみの菟原うはらノ薄男すすきおはとある町うらの人の住まない廃家の、はや虫のすだいている

冷たい竈かまどのうしろに屈こまって、匿かくれて坐つていた。そしてどのように言い聞かせてもそこから出ようとはしなかった。

「そのようにいうならば我に紙と硯すずりとをあたえね。」

やつとそういうだけであつた。供の者はたとうがみ 紙に硯をそえて持つて行き、右馬の頭の前に置いた。右馬の頭は、端然と硯に墨をあてがい、筆先を柔らげると重い筆さばきで書きながしたが、思い返していま一度書きあらためた。下ノ者はこの乞食男がかよう 斯様に美事な筆さばきをしたのを見て、主しゅのむかしの縁ある人も尊き宮人にちがいがなかったであろうと、改まった鄭重ていちょうさで、畳紙をおしいただいていった。

「恐れ入りましてございます。」

右馬の頭はもう一度よみあらためた。

君なくてあしかりけりと思ふにも

いとど難波の浦ぞすみうき

これを封じて、

「み車に奉れ。」と悲しげに右馬の頭は再び竈のうしろにかがみ込んだ。あたりは人を見分けることのできないほど、蝙蝠こうもり色の夜のいろがかさなつて行つた。

生絹は畳紙をひろげて久方振りで右馬の頭の文字を見入つたが、筆の勢いや品、匂いすらもむかしのままに残っていることを、いたくも心嬉うれしく思つた。

「君なくてあしかりけると思ふにも、……」と読み下し、「君なくてあしかりける……」
とまた繰返し詠みよ、そうであつたか、そうであらざらんにはわが心もかく騒ぐまじきにと、生絹は涙せきとめることができなかった。難波なにわの浦に来てよかつた。逢えたではないかと今やつと逢えた嬉しさを感じた。

「わたくしをそこに案内して下され。」

下ノ者の連しもれてはいった廃家は、むかし住んだ家のように在あるもの悉く荒れはてていた。
例の竈の裏の薪たきぎや藁わらをつんだあたりにも、戸の裏、古材のかげにも、もう、右馬の頭の姿

はなかった。此処ここならば今こんじゃく昔の思いに逢い語らうこともできたのに、心も知らずに去つて行つたことが悲しく身に応え、生絹はなつかしげに闇のあいだに眼を永くとどめた。闇というものがこんなに美しいものであることを生絹は、はじめて知つた。右馬の頭さま、と彼女はしずかに呼びつづけた。しかし答えはなく、その人は遠くに走つてもう姿はなかつた。

翌日あくるひ、四年前と同じように、淀の川尻から舟に乗つたが、ふしぎに生絹すずしにうやうやしく一揖いっしゅうをするものがあつた。占うことを自分の好きでやる、例の愁いのある額をしている男であつた。彼は生絹のつれた供の者を見て言葉をかけていいやら悪いやら控えているふうであつた。生絹はきょうこの男に再度も邂逅かいこうすること何やら宿縁に似たものを感じたが、身分のちがいが自然に生絹にあつたものか、生絹はだまって遠い生駒いこまの山なみを見ていた。

暫くしばらの後、彼の男はあらためて生絹の前に挨拶に来て、うやうやしく手をついたまゐつた。

「秋の難波なにわはいかがでござりました。お一人にてお帰りなされた御様子のように拝します

。」

「その節はお言葉添えを忝かたじけのういたしました。お変りものう。」

生絹はやつと挨拶をしたが、きょうの占う男の顔色は特にはれやかなものであった。生絹はそれが自分を占うていて顔色にあらわれたものと見るより外はなかった。

「しかしよくお尋ねなされました。お心のほどは誰たれびと人も銘じて忘れることはござりますまい。難波のことは難波のこと、お身様みさまは永くお仕合わせあるように。」

生絹はあらためて教えを乞うごとき眼差しの弱りを見せていった。

「わたくしはもう京をはなれることがございせんが、それでいいのでしょうか。わたくしの貴方あなたにお聞き申したいことはただ一つそのことでございます。」

「それでこそお身様の落着き先が、おわかりになったと申すものです。きっとそれはお別れになった方の願いでもございましたらう。」

彼はそういうと再び席を元の処に変わって行った。占う人の額は依然はれやかなものだった。舟は荻わぎと蘆あしのしげる岸近くすれすれに行き、生絹は白い手を蘆のひと本もとにふれて例の低い声で右馬の頭さま、ではおわかれ申しますと胸の中で悲しげに繰り返してささやいて行った。

青空文庫情報

底本：「犀星王朝小品集」岩波文庫、岩波書店

1984（昭和59）年3月16日第1刷発行

2001（平成13）年1月16日第6刷発行

底本の親本：「室生犀星全王朝物語 上」作品社

1982（昭和57）年5月発行

初出：「婦人之友」

1940（昭和15）年11月号

※表題は底本では、「荻《おぎ》吹く歌」となっています。

入力：日根敏晶

校正：門田裕志

2014年7月16日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られ

ました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

萩吹く歌

室生犀星

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>